

論 文

IT 革命の本質と社会変革の方向

—バーチャルからリアルへ—

竹 下 公 視

要 約

本稿では、内外情勢が不透明感を増している現代の社会経済の本質を捉えるためのひとつの視点として、IT 革命を取りあげ、「情報」「技術」「革命」の3つの構成要素に焦点を当てると同時に、近代技術と近代科学に焦点を当てて展開されるハイデッガーの近代論を参考にして、現代の諸問題をいかに捉え、それにいかに対処すべきか（社会変革の方向）を考察してみた。結果は次の5点にまとめられる。(1)近代史は、本質的に、「真実」や「現実」から遠ざかる歴史、つまり「リアルからバーチャルへ」の歴史であった。(2)その近代史の本質を規定した根本要因は、人間がすべての存在のサブエクトゥム（基本的主体）となり、世界が像となったことである。(3)そのことが、近代科学の「方法の優位」と近代技術の「立て組」の支配をもたらし、「真実」（存在の真理）の概念を喪失させた。(4)そのとき、IT 革命の本質は「バーチャルからリアルへの回転」であり、社会変革の基本方向もまた「バーチャルからリアルへ」である。(5)最後に、第5として、現在われわれにとって最も必要なことは、「リアルなもの」（存在するもの）を素直に受容し、その「リアルなもの」（真実）を明確に捉え、現実化していくこと（真実を実現していくこと）である。以上である。

キーワード：真実（真理）；リアル；バーチャル；情報；知識；知恵；IT 革命；技術論；社会変革；近代

分類番号：02-60；02-10；02-20；01-10

はじめに

今日の経済社会は、世界的には米国の IT バブルが崩壊し世界連鎖不況が危惧されているなかで、米国で発生したテロ事件（及びその後の対応）により、世界経済の先行きが危ぶまれているだけでなく、世界的規模での政治的・社会的・文化的な摩擦や衝突の潜在的な可能性が拡散し、今後の世界情勢はますます不透明感を増している。

他方で、国内においても、米国 IT バブルの崩壊の影響を受けて、ハイテク企業の不振が不況を先導し、深刻な不況の様相を呈してきている。とりわけ、1953年の調査開始以来の最高値を示した5.0%の完全失業率や構造改革による大量失業者発生の可能性、あるいは年金財政

の逼迫による年金不安など、国民の雇用不安・生活不安が高まり、ストレスに悩むサラリーマンが増大している。また、近年の凶悪犯罪の急増や社会のモラルの急速な低下、教育システムの混乱、そして今夏起こった靖国神社参拝問題・教科書問題をめぐる混乱、さらには世界的に問題となっている遺伝子操作やクローン人間誕生の可能性などに見られる歯止めのない科学技術の発展等々、国の内外における急速な社会経済の変化は混乱の極みの状況にある。

このような世界の現状を、われわれはいったいどのように捉え、どのように対処すべきなのだろうか。このような形で問題が立てられることそれ自体が少なくなっていることに、今日の諸問題の根本原因のひとつがある（問われなければ、答えは得られない）と思われるが、ここでは、IT革命とその社会経済的影響という観点から、IT革命の本質をできるだけ掘り下げて考察することにより、現代の経済社会の本質を捉え、社会経済システム変革の今後の方向性を探ってみることにしたい。

I. IT革命の歴史的位置

現在の経済社会の状況を正しく捉えるために、われわれはまずIT革命に焦点を当てることにしたい。言うまでもなく、われわれの関心はIT革命の技術的な側面にあるのではなく、そもそもIT革命とは何なのか、つまりその本質は何かということである。今日言われるIT革命、すなわち情報技術が社会に与える革命的影響を考察するとき、20世紀半ばに誕生したコンピュータを外して考えることはできない。そこで、ここではまずコンピュータの歴史を本稿の議論に関係する限りで簡単に整理することによって、考察の手がかりを得ることから始めることにしたい。

1. コンピュータの歴史¹⁾

周知のように、コンピュータの歴史は従来コンピュータの能力（ハードウェアの素子技術）に着目して「世代」と呼ばれ、区分されてきた。コンピュータの第一世代は1940年代後半の時期で真空管に依存していた。1950年代半ばになると、トランジスタが開発され、第二世代を迎える。1960年代から70年代初期は集積回路（IC）による第三世代、1970年代と80年代前半は、（超）大規模集積回路（VLSI, LSI）による第四世代の時代であった。1980年代には、それまでのコンピュータの進歩の線上で、次の世代（第五世代）の新しいコンピュータ（新世代コンピュータ）として「人工知能（AI）コンピュータ」の構想が打ち出され、盛んに喧伝された。

もともとコンピュータの主流はメインフレーム（汎用大型コンピュータ）で、官庁・軍・大企業が所有し、1970年代はその全盛時代であった。メインフレーム関係者は、機械自体の

可能性を追求し、それが最も明確に現れたのが人間の言葉を理解し思考する「人工知能」(AI: Artificial Intelligence) への挑戦であった。1980年代の新世代コンピュータの構想はこのような思考の線上で打ち出されたものである。ところが、1990年代に入ると、それまで傍流であったパソコンやワークステーションが主流となり、構想された新世代コンピュータは結局実現されずに終わった。

パソコンそれ自体はメインフレームに対抗して1960年代末に米国で誕生した。パソコン関係者は、人間にとってのいっそう洗練された道具としてのコンピュータを目指し、メインフレームのAI（人工知能）に対して、人間の「知能増幅機械」(IA: Intelligence Amplifier) を追求した。こうして、「一般市民のための安くて使いやすいコンピュータ」という理想が、パソコンの追求する目標となる。この理想の追求は、当初「安さ」(「コストダウン」)に焦点を当てたマイコンと、「使いやすさ」に焦点を当てた対話型のマンマシンないしインターフェイス技術(GUI)の二つの流れを生み出すが、やがて両者は合流し、1990年代半ばになるとGUIを備えた本格的パソコンが誕生する。1990年代におけるもうひとつの本質的变化は、パソコン同士がネットワークで結ばれ(ネットワークング)、グローバル・ネットワークが誕生し、パソコンの用途が根本的に変化してきたことである。本格的なパソコンの登場とそれを用いたネットワークングの社会的・文化的影響力は従来のコンピュータをはるかに凌駕し、グローバルネットワーク社会の到来が言われるまでになっている。その意味では、1980年代構想されながらも実現されなかった「新世代コンピュータ」は、本格的パソコンであるといえることができる。

以上のように、コンピュータの歴史を簡単に振り返ることによって、ここでわれわれは以下の本稿の議論と直接深く関わってくる三つの点に着目したい。一つは、コンピュータの発達は、AI、IA いずれであれ、基本的に同じ世界観(人間を一種の情報処理システムと見なす「機能主義的世界観」)を共有しており、西欧近代文明の伝統のなかにあるということ、そしてデジタル技術の本質は「操作可能性」ないし「制御」という点にあるということである²⁾。二つ目は、コンピュータの発展がメインフレームからパソコン(およびそれによるネットワークング)へと変化したことに表れているように、コンピュータというITを支える基本技術が文字通り「パーソナル・コンピュータ」として「個人」に向かったということである。このことは、技術(ここではコンピュータ)が、現代社会の構成原理としての「原子論的個人主義」を反映する方向へ発展してきたということを意味する。つまり、個人とパソコン(ないし携帯電話)のセットが正に社会の最小単位³⁾となり、いわば近代社会の出発点において、不可侵の権利をもつ個人からいかに社会を形成(構成)するかを考えたホブズ(Hobbes, T.)やロック(Locke, J.)らが前提条件としていたような状況が、ある意味で今日実現され

てしまっているということである。しかし、われわれは現在そのことが実際どのようなことを意味しているのかを真剣に考えなければならない時に来ている。そして、この点は次の点に深く関わってくる。

着目したい最後の三つ目は、「人工知能 (AI) から知能増幅機械 (IA) へ」の転換に関わり、ドレイファス (Dreyfus, H.L.) やウィノグラード (Winograd, T.) らによって、人とコンピュータをめぐる思索が深化してきたということである。たとえば、「自然言語理解システム」(SHRDLU) 開発者として人工知能で有名なウィノグラードの見解は、フローレス (Flores, F.) との共著『コンピュータと認知を理解する』⁴⁾のなかで知ることができるが、彼らによれば、有効なコンピュータ技術の設計のためには、コンピュータの開発思想を形作ってきた近代科学・近代技術の伝統とは別のものに置換する必要があるという。近代科学・近代技術の伝統とは、物理的な「客観的」世界と「主観的」な精神世界とを明確に区別する心身二元論的な「合理主義的伝統」(あるいは、「分析的伝統」)である。これに対する別のものとは、「世界内存在」として「現存在」(人)を捉えるハイデッガー (Heidegger, M.) や解釈されるものと解釈者との「解釈学的循環」の不可避性を受容するガダマー (Gadamer, H-G.) の立場である。ここでのハイデッガーやガダマーの主張のポイントは、人は歴史(伝統)や社会に帰属しており、その背景の下で自明でないことだけが表明され、自明で意識されてないことは言葉として表明されないということである。合理主義的な視野からこのようなハイデッガーやガダマー的な視野へ移行することは、自明ではあっても、意識されておらず(したがって、気づいていないために)言葉として表現されない側面に光を当てることであり、コンピュータ技術の設計へのアプローチが劇的に変化することが予想される。

以上の三つの点に注目することで、われわれがまずここで確認しておきたいことは、コンピュータが近代西欧文明の伝統のなかで、近代西欧の社会構成原理を反映しながら発達してきたにもかかわらず、というよりもむしろそうであるがゆえに、そのコンピュータの発達を突き詰めていくとき、人間とは何か、存在(する)とはそもそもどういうことなのかという問題、つまり存在論や哲学的解釈学など哲学的な視点(近代科学・近代技術・近代社会の伝統とは異なる視点)に必然的に密接に関わってこざるをえないということである。この点は、後に明らかになるように、本稿全体の結論(IT革命の本質や社会変革の方向)を示唆するものとなっている。いずれにせよ、現在最も重要なことは、コンピュータ・リテラシーの習得や情報社会における新たな差別(「情報リッチと情報プア」)の解消などということよりも、コンピュータとは何か、IT革命とはそもそも何なのか、それによって何が変わり何がかわらないのか、つまりコンピュータやIT革命の本質を問うことである。そのためには、「人間」や「社会」、「技術」や「自然」などの基本的概念の根源的な問い直しが必要となってくる。

本稿において、以下で試みようとしているのは、まさにそうした観点から IT 革命や現代の社会経済を捉え、社会変革の基本方向を考察してみようということである。

2. IT 革命（「情報」技術革命）の本質

さて、「IT 革命」とは何であろうか。現在、アメリカの IT バブルの崩壊によって一時期より下火になったものの、依然として IT 革命に関する議論の基本的論調（IT がこれまでのわが国の経済社会構造を根底から転換させるという論調）は変わっていないように思われる。とりわけ、わが国では、森内閣当時 IT は国策とまでなり、バブル崩壊後の長期不況を乗り越えるものとして大いに喧伝された。しかし、われわれがここで問題とするのはそうした経済的側面に限定されることなく、そもそも IT 革命とは何であろうかということである。IT 革命、すなわち「情報技術革命」という言葉は、「情報」（Information）・「技術」（Technology）・「革命」（Revolution）という三つの要素からなる。したがって、IT 革命の本質を捉えるためには、少なくともこの三つの要素に焦点を当てながら考察する必要がある。

ところで、今日「情報」が着目されるの大きな理由には、先進諸国において産業構造が大きく変化し、これまでのような第二次産業中心ではなく、第三次産業、とりわけ情報・サービス産業が重要性を高めてきたという事情がある⁵⁾。この文脈で情報に焦点を当てるとき、産業の発展が農業段階から工業の段階を経て、情報・サービス産業の段階を迎え、これまでの物質・エネルギー・労働に加えて「情報」が重要になってきているのは、確かであろう。しかし、その「情報」の重要性（価値）をわれわれはどのようにして知る（測定する）ことができるのだろうか。明確な測定単位をもつ物質やエネルギー、あるいは本質的な問題は残るものの一応時間で測定可能な労働と異なり、情報の測定は決して容易ではない。もちろん、情報理論におけるように「最少の情報とはふたつの可能性のうちのひとつを指定すること」という定義を与えれば、情報を量的にビット数として把握できないわけではないが、それはどこまでも数学的・工学的な捉え方であって、社会的・経済的な重要性とは直接関わりはない。また、情報生産のプロセス全体においては、情報の生産・処理・伝達・蓄積の4つの段階が考えられるが、そのうち情報の処理・伝達・蓄積は IT によってうまく処理できるのに対して、情報の生産（創造）には問題が残る。情報の生産は情報の「質」の問題に直結してくるのである。

こうして、まず「情報」というものをどう捉えるかが最大のポイントになってくる。データや知識、あるいは知恵といったものと、情報とはどのような関わりにあるのだろうか。日常的には「情報」や「知恵」、あるいは「知識」といった類似の用語が必ずしも十分明確に区別されて用いられているわけではないが、IT 革命の本質を捉えるためには、これらの言葉の

意味を区別し、正しく捉えておくことが不可欠である。「データ」とは何らかの視点から収集・整理・選択されたものであり、その意味で文字通り与えられたもの（与件）であり、それを組み合わせることにより「情報」がつくり出される。その「情報」がある基準のもとに体系化されたものが「知識」である。「知識」が一般に合理的・客観的なものとして人間の外部に存在しうる情報の体系であるのに対して、「知恵」は極めて属人性が強く、そのため人間の内部に存在する度合いの高い知識の体系である。ここでは、データ・情報・知識と知恵を一応このように区別して考察を進めることにしたいが、もちろん、現実にはデータと情報、情報と知識、知識と知恵との相違は必ずしも明確ではなく相対的なものに留まる。とりわけ、知識と知恵とは、日常的だけでなく学問的な用法においても、明確に区別されておらず、互換的に用いられたり、相互にオーバーラップする意味で用いられている。しかし、知識と知恵との間を根本的な違いを明確にしておくことがIT革命を捉える上で鍵となる。「知恵」の領域においては、自覚的な内省を伴うときは哲学的領域と大きく重なり、そうでないときには生活のなかで継承される（あるいは、歴史的に実証される）諸々の慣習や制度、伝統となる。このように、「知恵」とはいわば当該個人の「身についた知識」であり、「生きた知識」である。これに対して、「知識」とは、基本的に自分のものではなく「他人の知恵」である。それゆえ、ここで大事なことは、「データ・情報・知識」と「知恵」とは本質的に異なる性格をもつものであるということである。

これらの点を若干の補足を加えて図示すれば、図1のようになる。ここでとりわけ重要な

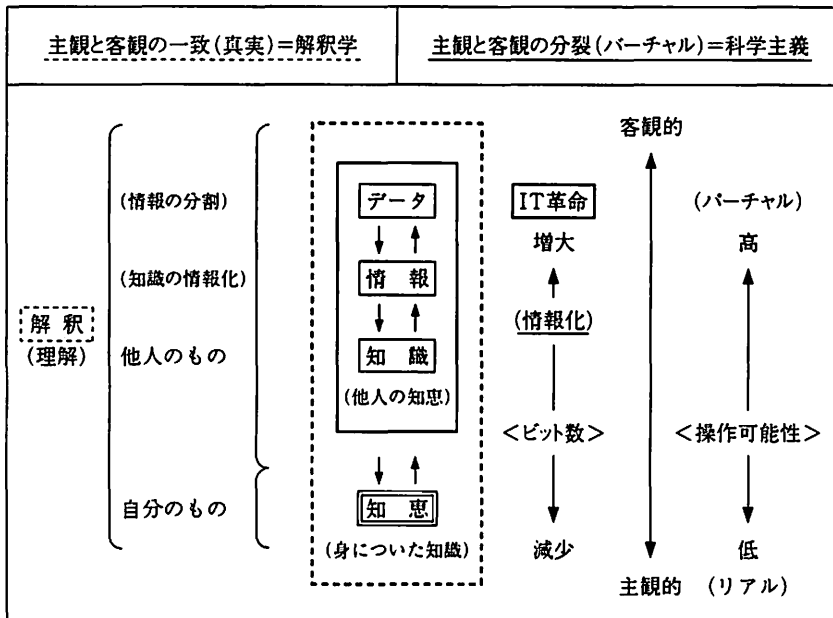


図1 データ・情報・知識と知恵の関係図

ことは、データ・情報・知識と知恵との間が明確に区別されているけれども、「データ・情報・知識」と「知恵」とが相互に循環することによって、データ・情報・知識と知恵はそれぞれ生きたもの（意味のあるもの）となるということである。ところが、近代科学・近代技術においては、精神と身体、主体と客体とが分離され、実践が欠如し、人間の身体と知識が、あるいは自己と知識が切り離される傾向が強い。したがって、「データ・情報・知識」の循環が「知恵」のレベルまで掘り下げられ「データ・情報・知識⇔知恵」の循環（解釈学的循環）が十分に形成されないために、情報や知識が実質的には意味が残っていない（生きていない）抜け殻だけとなってしまう。コンピュータやインターネットに代表されるITは、本質的に客観的・合理的な知識のみを扱うものであり、知恵を扱いうるものではない⁹⁾。したがって、今日IT革命で言われるところの情報化はデータ・情報・知識と知恵との間に大きな断絶がある。IT（革命）とは、要するに知識の情報化であり、操作可能性（イメージ操作の可能性）の増大のことである。このような変化は、「アナログからデジタルへ」とか、「リアルからバーチャルへ」といったフレーズで今日一般に表現されているものである。

IT（革命）によって、現在、経済社会はあらゆる領域で、あらゆるもの画一化が進み、操作（制御）の対象とされつつあるが（＝「マクドナルド化」⁷⁾、マニュアル化）、その一方では、IT（革命）により知識の情報化が進み、情報量は急速に増大しているにもかかわらず、意味のある情報がますます少なくなり、情報洪水の状態が出現し、加速している。その結果、物事や事象の関連性や全体性、あるいは本来性がわからなくなっている、というよりそういうものそれ自体がなくなりつつある（なっている）。したがって、多文化時代、共生の時代といっても、実体は価値相対主義と何ら変わりなく現状（現実の混乱状況）を追認しているにすぎない。つまり、それでは新しい時代の方向を指し示しているとは言えず、それ自体が現状の問題点をそのまま表現しているだけになっている。このような価値相対主義的傾向は現実の経済社会においてのみならず学問領域全体においても広く且つ深く浸透している現代の一般的特徴である。それゆえ、今日とりわけ重要なことは、「データ・情報・知識」の領域内に留まるのではなく、その領域を出て「知恵」の領域において「データ・情報・知識」を自覚的・内省的に（したがって、全体的・本来的に）捉えることである。そのときに初めて、それらが生きたもの・自分のもの（知恵）となり、真実の現われたもの、すなわち「現実」（リアルなもの）になりうるのである。

しかし、今日一般に言われるレベルでのITの導入は必然的に客観的・合理的な技術的知を偏重し、われわれが生活する上で不可欠なその他の知（たとえば、「作業の知」・「教養の知」・「救済の知」）を軽視・縮小させ、ものやサービスの質の低下、そして人間や社会全体の質の低下をもたらす危険性が高い。

もともと近代技術は、科学（知識）と技能（技術）が結びついた「科学技術」（テクノロジー）である。知識（科学）を道具・工程・製品へ適用した18世紀中葉から19世紀中葉の産業革命に始まり、19世紀末から20世紀前半にかけての知識の仕事（肉体労働）への適用を経て、現在、知識（科学）は知識そのもの、あるいは人々の思考の働きそのものに適用され、ITは「脳の機能の一部を代替する機械」となっている。また、個人の不可侵の権利から出発した近代社会は、個人を取り巻くさまざまな慣習や伝統（そして、そこに埋め込まれていた知恵）を人々の自由を妨げる拘束として悉く否定し取り払ってきた。その結果、今日の社会は個人（individual）が場所や時間や人々のとの結びつきからほぼ完全に切り離され、文字通り社会の最小単位として放置されている状態を生み出している。

こうして、今日IT革命により when, where, who, what, why が技術（how）によって固定されていた従来の経済社会（工業社会）から anytime, anyplace, anyone, anything, any reason が可能となり、いわば「any」によって特徴づけられる時代となっている。「any」は近代の division（分割・分化）の極であり、17世紀、あるいは18世紀以来の近代化のプロセス（近代の合理主義や自由主義）が行き着く所（先）まで来たという感が強い。その意味で、IT革命（デジタル革命）は近代の原理の極であり、したがっておそらく近代の転換点の性質をも合わせ持つはずである。ここに、IT革命に関する一般的理解を超えるIT革命の本質（の可能性）がある。この点を明確にするために、次にテクノロジー（科学技術）に焦点を当てて考察を続けていくことにしよう。

II. 「科学技術」と近代の本質

テクノロジー（科学技術）は近代科学（知識）と技術が結びついて成立したものである。したがって、近代科学や近代技術とは何か、そしてそもそも近代（モダン）とは何か（それとの関連で、ポストモダンの本質、あるいは少なくともその方向性とは何か）ということが重要になってくる。ここでは、これらの問題に最も根源的な問いを発していると思われるハイデッガーの議論を参考にしながら考察してみることにしたい。その際、われわれの関心はIT革命であるので、まずハイデッガーの「技術論」を取りあげる。技術の問題に関して、ハイデッガーは『技術論』において、根源的な検討を加えている。まず、彼の言うところに「素直に」耳を傾けてみよう⁹⁾。

1. 近代技術の本性⁹⁾

さて、技術とは一体何であろうか。この問いは、もちろん、ここでは技術的なことではなく、技術の本性を問題としているのである。通常理解は、技術とは目的のための手段であ

り、人間の行為であるといった、いわば機具的規定である。この一般通念は確かに正当な (richtig) 定義ではあるが、技術の「本性」(Wesen) はまだ示していない。

手段としての「技術的なもの」がそもそも何であるかは、「機具的なもの」を「質料因」・「形相因」・「目的因」・「作用因」という4種の因果関係に還元してゆくと明らかになる。しかし、この4種の因果関係に関しては、存在と真理の捉え方の根本的相違のために、現代人が「因果性」の観念の下に理解しているものとギリシア人が理解しているものとはまったく異なっている。彼らにとっては、この4種の原因とは「互いに関連しあっている責任の負い方」のこと（「何か或るものがそこに用意されて在るということについて責めを負っているということ」）である。この「責めを負う (verschulden) ということ」は、在るものを「現一存」(An-wesen) へ向かって導き、「いざーないーだす (ver-an-lassen) ということ」である。「いざーないーだす」4つの在り方は、まだ現存していないものを現存へ到来させるのであるが、そのために「誘い出すこと」はすべて「ポイエシス」(poiesis) であり、「出で一來一たらしこと」(hervorbringen) である。「出で一來一たらしこと」、「ポイエシス」は職人的な仕上げや芸術的な誘い出しだけでなく、「フュース」(physis・自然) もまた、たとえば「花が花自身のうちに花咲く綻びをもっている」ように、最高の意味において「ポイエシス」である。

このように「出で一來一たらしこと」を広い意味で捉えるとき、それがギリシア人の考えていた因果性の本性である。この「出で一來一たらしこと」とは、「蔽われているもの」(Verborgenheit・事割られざるもの) から「蔽われていないもの」(Unverborgenheit・事割られたるもの) へ現れ出ること、すなわち「発露」(entbergen) である。ギリシア人にとって、その「発露」とは「アレテイア」(aletheia・事割られたる真事) であり、われわれにとっては「真理」(Wahrheit) である。こうして、技術が「露わに発くこと」により、「事割り(理)」が生起する領域、すなわち「アレテイア」(事割られたる真事＝真理) が生起する領域のなかに存していることが、明らかになる。要するに、技術の本性は「露わに発くということ」(＝「真理」) であるということになる¹⁰⁾。

それでは、技術が露わに発くことの一仕方であるとして、近代技術とは一体何であろうか。近代技術もやはりテクネーであるかぎり、「露わに発くこと」の一在り方であることに変わりはない。しかし、それはもはや「ポイエシス」の意味における「出で一來一たらし」の形で展開されるのではなく、「立て一組」(Ge-stell) の形において露わに発く事割り(理)である。「立て一組」とは、「現実を役立つもの (Bestand) に仕立てる在り方において露わに発くように、人間を立たせる、すなわち挑発 (herausfordern) する、その立たせるということを経営してゆくもの」である。つまり、「立て一組」は露わに発く在り方のことであり、その在り方

が近代技術の本性のなかで支配しているのである。しかし、それは何ら技術的なものではない。人間は技術に携わることによって、露わに発く一在り方としての仕立てに参加するが、近代技術は、仕立て行く発露として、決して単なる人間的行為でもなければ、人間行為内における手段でもない。人間が露わな発きに挑発されるという近代技術の本性は、すでに17世紀における近世自然科学の台頭のうちに現れている。自然科学の表象の仕方は、自然を予め一つの算定可能な諸力の連関として姿を現すように追い立てる。近代技術はこうした近代自然科学に支えられて初めて歩き出した。しかし、近代技術の本性は、17世紀の近世物理学に「始源的に逸早きもの」の前触れとして前兆を示したにすぎず、それは現在に至るまでも未だ自己を隠蔽している¹¹⁾。

さて、人間は「立て一組」によって挑発されたものとして、それが本性として存している領域（Wesensbereich・本性領域）のなかに立つ。近代技術の本性は、こうして、人間を露わな発きの途上に就かせているが、この「露わな発きの途に就かせている、その纏めゆく遣わし」が「運命」（Geschick・存在の遣わしの運命）である。この発露の「運命」は人間を常に全体として支配しているが、それは決して宿命（Sciksal）ではなく、人間は「運命」の領域に従属している（gehören）限りにおいて初めて自由となる。つまり、自由とは「明かりを浴びたもの、すなわち露わに発かれたものという意味での開闊の地（das Freie）を主宰するもの」なのである。このとき、人間は決して運命の「隷従者」（Höriger）となるのではなく、運命の「聴従者」（Hörender）となる。「聴従者」の自由は、近代的な意味ではなく、「存在の遣わしの運命」に任運し、自らとなる真の自由である。そのとき、人は真理が現れ起こる「開闊の地」に達することができる。

ところが、人間は仕立てのなかで露わに発かれたもののみを追求し、そこに留まろうとするために、より始源的な事割られたものの本性とその事割り（理）に参入すべき可能性が閉ざされてしまう。発露の運命は常にこのような「危険」（Gefahr）にさらされており、運命が「立て一組」の在り方をもって支配するとき、最大の危険が存在する。今日この危険は二つの点で見ることができる。まず現在の人間には、現実なるものが、万物がただ人間の拵え物である限りにおいてのみ存立（存在）するものであるかのごとく映る。そのために、人間は人間の本性（本来性＝存在の真理の領域のなかに帰属しつつ生きる在り方）に出会うことがない。次に、「立て一組」の仕立ての支配するところでは、それ以外の発露の可能性が悉く駆逐されてしまう。つまり、挑発してゆく「立て一組」は単に「ポイエシス」という露わな発きの在り方を蔽いかくすだけではなく、むしろ露わに発くこと（したがって、事割り、真理）それ自体をも隠蔽してしまう。しかし、危険なものは決して技術ではなく、技術の本性が露わな発きの運命の一つとして危険なのである。

このように、「立て一組」の支配は、より根源的な発露も人間の本来性をも塞ぎ立てる。この塞ぎ立てが危険のなかの最高の危険（＝存在の忘却）である。この危険のなかで、どこに「救い」の望みがあるのだろうか。それは、その危険がまさに危険と言われるべき危険として現れ起こるとき、その危険それ自体が「救うもの」に生まれ変わる。つまり、危険が真に危険として存在するとき、存在の忘却が忘却として訪れるが、そのときその存在の忘却はもはや忘却ではなくなる。この忘却の「転向」（Kehre）とともに、存在の「見護り」（Wahrnis）が現れる、つまり世界が世界として現れるのである。それが、存在の「救うもの」である。したがって、ここで「転向」とは、「存在における転向」、すなわち「存在の忘却」から「存在の成存（Wesen）の見護り」への「転向」のことである。それは、人間が存在の真理のなかに帰属しつつ生きる「脱自的存在」になるとき、可能となる。すなわち、人間は自分自身に属しているのではなく、人間が存在（自然と歴史）への帰属性に基づくとき初めて存在を聞き取ることができるのである。

以上が、ハイデッガーの「技術論」である。今日のIT革命を捉える上でのポイントはそこにすべて含まれているとも言えるが、IT革命の本質をより明確に理解するために、次にハイデッガーが近代の学問（近代科学）の本質を考察することを通して捉えた近代の本質に関する議論に目を向けてみることにしよう。

2. 近代（科学）の本質¹²⁾

近代の学問（近代科学）は、近代技術（機械技術）と並んで、近代の本質的な現象と見なされるが、これらの現象の根底には、存在と真理の近代特有の捉え方が潜んでいる。近代の本質を捉えようとするハイデッガーの考察はまず近代の学問に向けられる。それでは、近代の学問の本質とは何か。彼によれば、今日学問と呼ばれているものの本質は「研究」（Forschung）であり、その研究の本質は①「企画」（Entwurf）と「厳密さ」（Strenge）、②「方法」（Verfahren）、および③「企業」（Betrieb）によって規定される。すなわち、近代の学問は、まず存在するものの領域内における見取り図の「企画」と「厳密さ」との規定により特定の対象区域が確保され、つぎにその「企画」が「方法」において初めて本来のものに展開され、そして「企業」によって整えられる。換言すれば、「企画」に基づく近代科学は本来個別科学であるが、その個別科学が「企画」の発達に応じて「厳密さ」によって確証された「方法」によって必然的に専門分化して行く。近代科学が特定の分野のなかへみずから進展して行くのは、それが「企業」によって規定されているからであり、そのとき専門分化は結果ではなく、「企業」によって進歩の原因となるのである。要するに、「企画」・「厳密さ」・「方法」・「企業」が近代の学問の本質を構成し、近代の学問を「研究」にする¹³⁾。ここで大事なことは、

研究としての近代科学においては、対象として存在するもの（自然と歴史）に対する「方法の優位」が確立することである¹⁴⁾。

それでは、研究としての近代の学問はどのようにして可能となるのであろうか。換言すれば、存在と真理のどのような捉え方が、研究としての学問の成立根拠となるのだろうか。それは、存在するものの存在が表象の働きの対象であることに求められ、真理が表象の働きの確実さに転化したときに初めて、研究としての学問が成立する、ということである。存在と真理のこのような捉え方は、もちろんデカルト（Descartes, R.）によって初めて規定されるが、それは近代の学問の本質を基礎づけると同時に、近代一般の本質を規定している。

近代の本質を規定するこの存在と真理の捉え方において決定的なのは、人間がズブエクト（Subjekt）となることにより人間の本質一般が変化することである。Subjekt というドイツ語はラテン語のズブエクトゥム（Subjectum）に由来する。Subjectum はもともとヒュポケイメノン（hupokeimenon・基体）というギリシア語のラテン語訳である。ギリシア語 hupokeimenon は「前に一横たわっているもの」、「根拠としてすべてをおのが上に集めているもの」を意味する。したがって、人間がズブエクトゥムとなるということは、人間がすべての存在するものがその上に基礎づけられるような存在するもの〔基体的主体〕になるということ、すなわち人間がすべての存在するものの関与の中心となるということ、を意味する。それは存在するものの把握が全体として変化するとき初めて可能となるものである。それではこの変化は一体どこに現れるのだろうか。

近代においては、存在するものは表象されてあることにおいて初めて存在的になる。そこにおいて存在するものは、古代や中世的なものに対してひとつの新しいもの、すなわち「世界像」（Weltbild）になる。したがって、「世界像」は、決して古代や中世的なものから近代的なものになるということではなく、そもそも「世界が像になるということ」そのことが、近代の本質を表しているのである。像の本質は「一緒に立っていること」（組織体系）であり、それは「存在するものの対象性の企画から展開するところの、前に一立てられたものそのものにおける、構造の統一」を意味する。存在するものが「体系」としてわたしたちのまえに立っているということが、わたしたちが何かについて「分かっている」（像においてある・im Bilde sein）ということを表している。ところで、存在するものの近代的解釈においては、存在するものは対象化されることで在る仕方では存在を失うが、その代わりに対象化された存在するものに対して速やかに「価値」を付与し、それをすべての行為行動の目標とすることで、存在するものの存在の喪失は明確に感知されることがない。この意味で、「価値」の考え方は、近代的な存在の捉え方にとって、「体系」と同じく本質的なものである。

このようにして、存在するものが世界像となるばあいには、存在や真理についての解釈が根

本から全体として転換することになる。「人間が存在するもののなかでスペクトウムとなる」ということは、「世界が像となる」ということと全く同じことなのである。ここに、近代の本質が存する。

これに対して、中世や古代においては存在や真理を全く異なる形で理解していた。中世にとっては、存在するものは最高原因としての人格的な創造神から創られた被造物であり、このように創造されたものとして創造の原因に対応すること（存在の類比）が存在するものが在るということである。したがって、そこでは人間がスペクトウムになることも、世界が像となることも不可能である。存在と真理についてのギリシア的解釈は、近代的精神からさらに距たっている。ギリシアにおいては、存在は「現に在ること」であり、真理は「隠れないこと」（アレテΙΑ・aletheia）である。つまり、存在するものの受容者として在るギリシア人においては、人間は決してスペクトウムではありえないし、また世界が像となることもありえないのである。

近代の形而上学はデカルトが人間をスペクトウムと解釈することで開始される。デカルトの形而上学の課題は「自由そのものの確実な自己規定としての自由へと、人間を解放することに対して、その形而上学的根拠を創ること」であった。なぜなら、キリスト教の啓示と教会の教義という確実性（＝束縛）からの解放は、みずからを解放する「人間が、真なるものをば、かれの自身の知（Wissen）によって知られたものとして、確保するというその確実性への解放」でなければならなかったからである。そのような本質的要求を満足する根拠が「われ思う（ゆえに）われあり（ego cogito, ergo sum.）」ということである。このとき、「スペクトウム、〔ならびに〕根本確実性とは、表象する人間と表象された人間的あるいは非人間的な存在するもの、すなわち対象的なものとが、つねに確保されて共に表象されていること」である。こうしたスペクトウムの存在論のための見取り図がデカルトによって与えられたのである¹⁵⁾。

スペクトウムとなり、主観（Subjekt）となることが、思考し表象する人間の本質的特長となる。本質的に、これによって人間は自分みずからを捉え、欲するにしたがって主観性の本質を規定・充足することができるようになる。けれども、表象することは、もはや現に在るものの受け容れではありえない。つまり、存在するものは現に在るものではなく、表象され対象化されたもの、あるいはそれのみになる。このようにして、人間がスペクトウムとなり、世界が像となることにより（ここにヒューマニズムが現れてくる根拠がある）、表象され対象化されないもの（その意味で、計量しえないもの）が「見えない影」となって、地上の一切の事物を蔽うことになる。なぜなら、近代の根本的な出来事は、像（Bild）として世界を征服してゆくことであり、そこにおいて（形像 Gebilde において）、人間はすべての存在す

るものに尺度を与えるような存在するものでありうるための地位を目指して闘うからである。

しかし、必然的に、われわれ近代人（現代人）はその「見えない影」を知る（見る）ことはできない。近代人にとってその「見えない影」は「無」であるけれども、それは決して何もないということではなく、「無」として存在するのである。「無」は存在そのものであって、人間がみずからを主観として克服するとき（すなわち、人間が存在するものをもはや客観として表象しないとき）、人間は存在の真理に委ねられることになる。

ハイデッガーが近代の学問（近代科学）の本質を考察することを通して捉えた近代の本質は、以上のようなものであった。近代技術と近代科学に典型的な形で実現している近代の本質に関する以上のハイデッガーの議論を踏まえて、次にIT「革命」の本質と社会変革の基本方向について考察することにしよう。

III. IT 革命（情報技術「革命」）の本質と社会変革の方向

われわれは、これまで、IT 革命の歴史的位置を確認するために、コンピュータの発展の歴史を振り返り、また「情報」の視点からIT 革命の把握を試みた。さらに、前節では「科学技術」に焦点を当て、近代技術や近代科学、および近代そのものに関するハイデッガーの議論を取りあげ、その概要を示した。ここで、われわれはハイデッガーの議論とIT「革命」とが本質的にいかに関わってくるのかを検討・考察してみることにしよう。

1. リアルからバーチャルへ（近代の歴史）

まず、ハイデッガーの議論のエッセンスは、大きく3つのポイントに整理することが出来る。まず、第1に、近代の諸現象を支配する近代の本質を規定するものは、「表象の働きの対象であることとしての存在するもの」と「表象の働きが確実であることとしての真理」という存在と真理に関する近代特有の捉え方である。ここで決定的に重要なことは、近代において初めて、人間がスペクトラムとなり世界が像となることである。このことが、企画・厳格さ・方法・企業で特徴づけられる研究としての近代の学問を成立させ、同時に露わに発く一仕方として、現実を役立つものとして仕立てるよう人間を立たせ（挑発し）、纏めゆく「立て組」としての近代技術を成立させるのである。この近代科学（近代自然科学）と近代技術が結び付くことにより、近代の経済社会は飛躍的な発展を遂げることが可能になったのである。

第2に、新たな専門分化された領域へと常にみずから進展していくよう企業的性格によって規定されて（根拠づけられて）いる近代科学においては、その研究所的性格が拡大・強化

されることによって、存在するもの（自然と歴史）に対する「方法の優位」が確立される。また、「立て組」の支配する近代技術においては、露わに発かれたもののみに留まることにより、新たな、より始源的な事割りや真理が露わに発くことの可能性が排除されるという技術の本性のもつ究極の危険が存在する。近代科学の「方法の優位」と近代技術の「立て組」の支配という二つの特性は、もともと存在と真理に関する近代特有の捉え方のなかで、人間がスペクトウムとなり、表象され対象化されないもの（計量化しえないもの）が「見えない影」となり、地上の一切の事物を蔽うということを指している。

最後に、第3として、近代科学の「方法の優位」や近代技術の本性がもつ究極の危険によりもたらされる「見えない影」（「無」）の存在を知るためには、われわれ人間がすべての存在のスペクトウム（基体的主体）となることを止め、「存在の遣わしの運命」にみずからを任すことが必要不可欠である¹⁶⁾。そのとき初めて、人間は存在の真理に委ねられ、みずからを主観として克服することができ、「見えない影」の存在を知ることができるのである。

ハイデッガーの主張のエッセンスは以上の3つのポイントに整理されるが、この3つのポイントのなかに、現代の経済社会において起こっている諸問題の根本原因が、したがってそれらに対する基本的な対処の方向がほぼすべて示されているということができるように思われる。以下では、この点を明らかにするなかで、IT革命との関わりを取りあげ、IT革命の本質が何であるかを解明することにしていきたい。

まず、上述の3つのポイントにも示唆されるように、現代社会の諸問題の究極の根本原因は、近代において人間がスペクトウムとなった（そして、なっている）ことにある。人間がスペクトウムである場合にのみ、個体主義の意味での主観主義に陥る危険性が成立する。その結果、主観主義対客観主義、価値絶対主義対相対主義といった二元論に陥り、それが「真理」や「真実」の概念を形骸化させ、実際に「真実」や「現実」からの乖離が進んだ。このことを図式的に示せば、図2のように表せる。図2においては、主観性と客観性という2つの軸によって4つの象限（①②③④）が示されるが、そのうち現在一般的に考えられているように客観性と主観性が対立するという形で、すなわち客観性の増大（減少）が主観性の減少（増大）であるという形で両者の関係が捉えられているのは、第②象限と第④象限の領域である。一般的な理解では、主観性を押さえ客観性を重視する第④象限が、合理的・科学的な領域に属し、今日の社会では最も正当な考え方として主流をなしているものである。これに対して、客観性が弱く主観性の強い第②象限はいわば非科学的な領域として日蔭の存在である。しかし、この領域はこのように半ば蔑視されながらも、第④象限に位置する客観主義（合理主義）・科学主義と同程度に、あるいはそれ以上にある種の存在感をもち現代社会に広く受け容れられている領域でもある。

しかし、図2において4つの象限「全体」が主観と客観の軸（外側の細い破線）で構成されていることに示されるように、本質的に客観はどこまでも主観によって把握せざるをえない。つまり、純粹客観はありえないがゆえに、自覚的・内省的知（知恵）の体系としての哲学や形而上学が不可欠であり、それらが学問全体の基盤となるのである¹⁷⁾。図2において、このことを示すのは、第③、第①象限であり、両象限を貫く右上がりの「主観＝客観」の線（太い破線）である。それゆえ、われわれの観点からすれば、第④象限にある客観主義（合理主義）・科学主義と第②象限にある主観主義・相対主義とは同じコインの裏表であるにすぎない。なぜなら、ともに初めから主観と客観を対立するものと捉え、その結果存在の真理から乖離し、真理や真実の概念を放棄している点で、本質的にまったく同じ性質のものだからである。つまり、第②、第④象限で示される領域は真実や現実から離れる方向を示しているという意味において、「バーチャル化」の領域なのである。そして、第④象限の客観主義・科学主義が強調されればされるほど、第②象限の主観主義・相対主義が広く蔓延し、そのことがまた客観主義・科学主義をよりいっそう強化することになる。したがって、客観主義・科学主義と主観主義・相対主義とはその本質においては同じものである。こうして、近代・現代社会においては、「バーチャル化」の傾向が加速していくことになる。結局、デカルトが人間をスプエクトゥムと規定したときから、原理的に、近代社会は存在の真理から乖離し、真実を放棄し、現実と分離していく必然性をもっていたということが出来る。その意味で、近代社会は現実（リアル）から離れ遠ざかる形で進展してきた。それを一言で表現すれば、近代社会の進展は「リアルからバーチャルへ」の流れのなかにあったということが出来る。

ところで、IT革命によって、時間・場所・人物に関係なくどこからでも発信・受信でき、

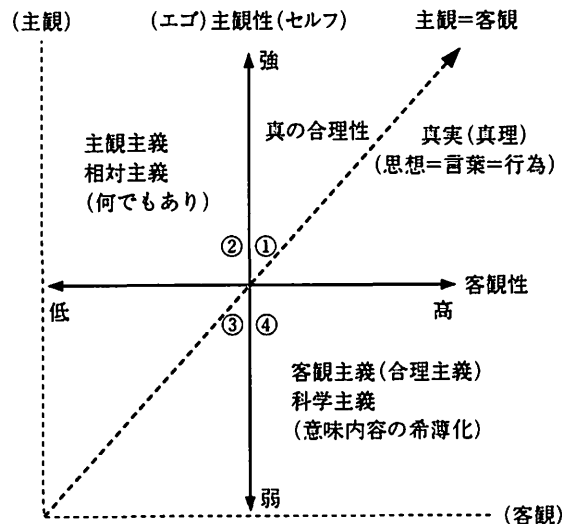


図2 客観と主観の一致

またリアルタイムで対話・探索・視角化が可能となつて、ひとつのバーチャルな世界が形成される。このようなバーチャル世界は大きな可能性をもち、このことが一般に「リアルからバーチャルへ」という形で表現されているものである。この点で、IT革命と上述の近代社会の本質とが密接に関わってくる。両者の関係についてこれまでのわれわれの議論から言えることは、IT革命の一般的理解と近代社会の進展とは「リアルからバーチャルへ」という点で全く同一の性質のものであるということ、さらに、近代社会のそうした傾向をよりいっそう促進しようとするものであるという意味において、IT革命は近代の原理の極であるということである。

しかし、IT革命とこれまでの近代社会の発展の傾向とが同一線上にあるとすれば、なぜIT「革命」なのだろうか。ここで、われわれはIT革命の「革命」なる意味を真剣に検討せざるを得ない。革命とはもともと「天命を革（あらた）める」という意味である。また、英語のrevolutionも「回転」や「回帰」の意味であり、これまでの傾向や趨勢から「回転」すること、あるいは現在の傾向が生まれるそれ以前の世界への「回帰」のことである。したがって、上述のように、近代の本質が「リアルからバーチャルへ」という性質を持ち、実際近代社会の発展がそうした傾向を示してきたとすれば、「リアルからバーチャルへ」という同じ表現で表されるIT革命は決して「革命」とは呼びえないものである。そうだとすれば、IT「革命」とは一体どういう意味なのであろうか。それとも、IT「革命」という表現はまったく意味のないものだったのだろうか。

いや、そうではない。われわれは「IT革命」なる表現には一般に理解されている以上のものが包摂されている、あるいはむしろ正確には、一般的な理解とはまったく逆の意味において、したがって真の意味で「革命」と呼ぶに相応しいものが包摂されていると考える。IT革命は、図1（の右面）においては、ビット数の増大、客観性の増大（主観性の減少）による操作可能性の増大として示されたが、それは明らかに近代技術や近代科学の本性の延長線上にある。逆に表現すれば、企業性格に規定される研究としての近代科学と、万物を「役立つもの」とする「立て組」が支配する近代技術の進展の究極の結果がIT化であったということができる。したがって、現在の科学と技術がIT化を迎えている現状においては、データ・情報・知識と知恵との分離が極限に達し（図1参照）、データ・情報・知識が知恵（やその自覚的・内省的な体系であるところの哲学や形而上学）によって「真理」や「真実」との関係を確証されなくなってしまうている。この状況は、図2においては、相対主義や客観主義の第②、第④象限の領域が支配的になり、主観＝客観の「真実」の解明を追求する第③、第①象限の領域が顧みられなくなっている状況に対応する。

今日IT化は、このような根源的な意味において、極限的な状況を迎えているが、実はその

極限状況自身がむしろこれまで近代科学や近代技術が軽視・否定してきていた「知恵」や「真実」の部分に立ち返らざるを得ない状況を生みだしているのである。IT 革命が本当に革命であるとすれば、それは一般に言われる「リアルからバーチャルへ」ではなく、むしろその逆の「バーチャルからリアルへ」の「回転」でなければならない。バーチャルな世界が思考の世界に留まるばかりでも、またバーチャル性が現実（リアル）化するものであるとしても、いずれにしても必要とされるものはリアルな世界（現実世界）に関するわれわれの明確な理解（把握）である。このリアルな世界に関するわれわれの理解（把握）の明確さの程度が、バーチャルの「力」が正当に行使される（リアル化される）程度を決定する。つまり、リアルの程度が高まれば高まるほどバーチャルが生きてくるのであり、逆にその程度が低ければ低いほどバーチャルの「惑わし」の程度が高まるのである¹⁸⁾。

しかし、バーチャル性がバーチャル性に留まるのであれば、それはこれまでの流れの単なる延長であって決して「革命」ではない。したがって、IT 革命とは「バーチャルからリアルへ」の「回転」でなければならない。そして、今日真に必要とされているのは、この真の意味での IT 革命、すなわちバーチャル性をいかにリアル化できるかということなのである。事実、IT 化が極限まで進んだ今日においては、いかにリアルなものを（たとえば、コンテンツ）を組み込むことができるかが、要請されているのである。要するに、IT 革命の本質とは、「バーチャルからリアルへ」というフレーズで表現可能であり、現実の生活をいかにリアルなもの（地域や歴史や自然）に根付かせることができるかが、根本的な課題となっているという意味で、IT「革命」なのである。そして、われわれが本稿の冒頭「コンピュータの歴史」において着目した三つの点は、結局このことを（「バーチャルからリアルへ」の「回転」）を示唆していたと考えることができる。

2. バーチャルからリアルへ（社会変革の方向）

今われわれは、IT 革命とは「バーチャルからリアルへ」の「回転」であり、現在最も必要なことは、いかに「リアルなもの」（つまり、現実世界）を明確に捉え、バーチャルの「力」をリアル化できるか（あるいは、リアルと関連づけることができるか）ということである、と主張した。しかし、それはわれわれの主張の流れから理解されるように、ただ IT だけがそうした「回転」を要請しているという主張ではない。むしろ、近代の本質それ自体が、現在「IT 化」の形でその最高の危険性、つまり「存在の忘却」の忘却を示し、この忘却の「転向」とともに、存在の真理が現れてくるということなのである。その意味で、IT 革命は近代の本性が生みだした「存在の忘却」から「存在の成存の見護り」への「転向」を象徴的に表しているものと見ることができる。

それでは、「存在の忘却」から「存在の成存の見護り」への「転向」、あるいは「バーチャルからリアルへ」の「回転」とは、どういうことなのだろうか。当然、それは「リアルからバーチャルへ」が「バーチャルからリアルへ」に転換することである。つまり、既に述べたように、17世紀、あるいは18世紀以降の近代の歴史は「リアルからバーチャルへ」の歴史であった。ITはその近代史の極限に位置し、同時に「バーチャルからリアルへ」の転換点に位置している。したがって、われわれは現在すべての面での根源的な反省を迫られているといえることができる。最大のポイントは、「リアルからバーチャルへ」の近代史が現在ITによって極限を迎えているというとき、その「バーチャル」の根本原因がどこにあるのかということである。それは、いうまでもなく、人間がスプエクトゥムとなり、すべての存在の基本的主体となったことである。そのことが、やがて個々人の単なる嗜好や思いつきにすぎないことを個性や自由や権利として尊重する社会風潮を生み、「真実」（das Wahre）という考え方の軽視・消失につながっていく。その結果、今日、意味のない（中身の無い）情報や言葉が駆け巡り、真実や現実と遊離した思考や行動が溢れかえる、まさに「バーチャル」な経済社会になってしまっている。

このような状態は、前掲の図2においては、第②、第④象限が支配する状況として示された。また、図1においては、データ・情報・知識だけのなかでの（つまり、知恵と結びつかない）情報や知識の循環として示された。それゆえ、「バーチャルからリアルへ」の方向も自ずと明らかである。つまり、主観と客観を対立的なものと考えのではなく、図2の第③、第④象限に示されるように、どこまでも「真実」を捉えるための主観でなければならない。その意味での、主観と客観の一致を目指すものでなければならないということである。また、データ・情報・知識だけのなかでの知識や情報の循環ではせいぜい「正当さ」（Richtigkeit）の基準を満たすにすぎず、図1に示されるように、それが知恵との循環を含み、自らの体験や経験のなかで確証されながら知識や情報が生み出されるとき初めて、それは「真実」になるといえる。しかし、このように「真実」を捉えることは、スプエクトゥムとしての、換言すれば自由で独立した人間には不可能である。というのは、近代社会の理念とされる「自由で独立した個人」はそもそもありえないからである。本来、人間は自然と歴史に帰属する存在である。したがって、自然と歴史へのわれわれ人間の帰属性を素直に認めるときに初めて、「真実」を捉えることができるのである¹⁹⁾。

近代史においては、人間がスプエクトゥムになることによって、具体的には近代科学の「方法の優位」と近代技術の「立て組」が支配することによって、表象され対象化されなかったものが「見えない影」となり地上を蔽った。今日の社会経済の諸問題のほとんどは、このような形で「見えない影」となっていたものが多種多様な形で表面化しているにすぎない。そ

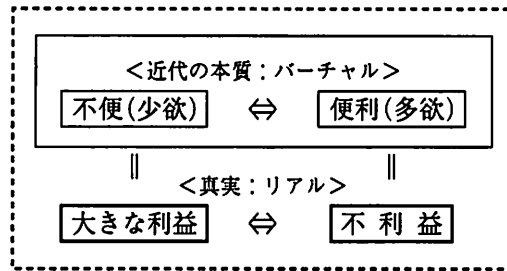


図3 近代（現代）社会の錯覚

れゆえ、今日発生している諸問題に対しては、決して対処療法で解決できる性質のものではなく、その根本原因の基本的な理解に基づいた解決策を必要とする。それは、結局、人間が自然と歴史に帰属することを受容し、人間がスプエクトゥムであることを止めること、したがって存在と真理に関する近代特有の捉え方を大転換することである。それが、「バーチャルからリアルへ」の「回転」の大前提であると言えよう。

人類の歴史を直線的な発展の歴史と捉えている現代人にとって、「バーチャルからリアルへの回転」は、ほとんど説得力をもたない「非現実」的なことだと感じられるかもしれないが、歴史的に見るときむしろこの近代の200年から300年の間が異常な時代（その意味で、「非現実的」な時代）だったのであり、それ以外の時代のほうがむしろ正常な時代だったのである。事実、伝統的な社会は近代社会のような「バーチャル」な社会ではなく、「リアル」な社会だったのである。インド独立の父といわれるガンジー（Gandhi, M.K. : 1869-1948）は、近代社会のもつ危険性、すなわち「バーチャル」な性質を誰よりもはっきりと自覚していた。ガンジーの人生は「真実の実験」の人生である²⁰⁾。彼が歩んだ道は、思想と言葉と行為とを一致させる「サットィヤーグラハ」（真実・愛を堅持することから生まれる力＝魂の力、精神力）の実験である。ガンジーの有名な「非殺生」（アヒンサ）（＝ブラーフマチャリア：自己抑制）は、「真実」を実現するただ一つ的手段であった。「非殺生」、すなわち自己抑制は、人間をスプエクトゥムと捉える近代の人間観と正反対のものである。彼はそこに「真実」を捉える核心があることにいち早く気づき、一生涯それを実践したのである。ガンジーの「真実の実験」に関係して、「バーチャルからリアルへの回転」を図式的に示せば、図3のようになる。

近代（現代）人はただひたすら「便利さ」を追求し、その「便利さ」を実現するために生じる裏側の「不利益」（公害や貧困など）についてはほとんど気に留めることがない。さらに、「便利さ」を選択した結果捨て去った「不便さ」のなかに「大きな利益」（「真実」・「自治」・「幸福」など）が隠されていることに気づくことなく、進歩の道を突き進んできた²¹⁾。近代科学の「方法の優位」と近代技術の「立て組」の支配による近代の本質（「リアルからバーチャルへ」の傾向）は、図3においては、「不便」との比較による「便利」の一面的・徹底的追求、

およびその結果としての「不利益」の発生と「大きな利益」の喪失として表わされる。これに対して、「バーチャルからリアルへ」の「回転」は、自己抑制（「少欲」）による「大きな利益」の実現・獲得と「不利益」の回避として示される。ガンジーは、わが国でいえば明治から第二次大戦敗戦直後までの時代に（インドでも日本に劣らず、あるいは日本以上に激動の時代に）、「便利さ」と「不便さ」の裏側に隠された「不利益」と「大きな利益」をはっきりと自覚し、「非殺生」による「真実の実験」の人生を歩んだのである。

それでは、「リアルからバーチャルへ」から「バーチャルからリアルへ」の転換点にあると捉えられる現代社会において、実際に、どこにその転換点を求めることができるのであろうか。つまり、現代社会の「バーチャル」な性質は具体的にはどこに現れているのであろうか。この点について、最後に考察してみよう。何度も述べているように、近代の特質は人間がスプエクトゥムとなり、世界が像となったことである。像の本質は表象された存在の、したがって前に立てられたものの統一である。そのとき、対象化された存在するものは存在の価値を失う代わりに、別の新たな「価値」が付与される。結局、現代社会は経済的な体系（すなわち、経済システム）としてのみ存在し、人間は消費者と労働者としてのみ価値を有する存在にすぎない。さらに、近代科学と近代技術に支持される経済システムは絶えず「経済発展」を目指し、消費者と労働者はそのための歯車として機能するのである。「経済発展」は現代社会のイデオロギーであり、「経済的価値」（すなわち、お金）と結びつかないものは「存在」価値がないのである。その結果、すべての存在が「経済的価値」で一元的に評価され、社会経済の一元化が進んでいる。グローバル化とIT化（デジタル化）はそうした傾向をさらに押し進める性質を持つ。しかし、それはほとんどハイデッガーのいうところの「存在の忘却」の「忘却」に等しく、国内国外を問わず、さまざまな問題が噴出し、「存在における転向」を示しつつあるように見える。

したがって、今日の諸問題の解決のためには、むしろ逆に「経済発展」ではなく、「定常経済」（つまり、ゼロ成長）を基本として、存在するものを「経済的価値」で一元的に評価するのではなく、存在するものの「本質」に応じて「永遠の価値をもつもの」と「束の間のもの」との間を、あるいは生活に不可欠な「必要」（need）と単なる「欲求」（want）とははっきりと区別し、なくてもすむ性質のものはできるだけ抑えていくことで、自然やもののなかで人間が「ゆとり」をもち、精神的に肉体的にも「健康」に暮らしていけるような「知恵」を身につけ、実践することが求められる。それが、18世紀以来の近代化のプロセスが極限（「any」の時代）を迎え、準拠枠を失い、自己を喪失して生きがいやリアリティを失っている現代人が「バーチャル」な世界から「リアル」な世界へ「回帰」する基本方向であると考えられる²²⁾。それゆえ、混乱の極みの状況にある今日の諸問題の解決も基本的にこの方向で進められるべ

きであるし、実際にそうになっていかざるをえないと思われるのである。

おわりに

1989年の東欧革命以降の現代社会においては、国の内外を問わず、政治・経済・社会・教育・文化などの分野・領域に関係なく、1990年代以前ではまったく考えられなかったような出来事や事象がつぎつぎと発生している。しかし、それ以上に驚くことに、今やわれわれはそうしたことにほとんどリアリティを感じないまでになっているのである。今日こうした形で諸問題が噴出している状況を一体どのように把握すべきなのであろうか。このような問題意識を根底に持ちながら、本稿では「IT 革命」（情報技術革命）に焦点を当てることで、現代の社会経済の本質を考察してきた。その際、「IT 革命」という言葉を構成する「情報」・「技術」（近代科学技術）・「革命」の三つの要素に焦点を当て、また近代科学や近代技術を中心に展開されているハイデッガーの近代の本質論を参考にしながら、具体的な考察を行ってきた。ここで、本稿の内容を確認する意味で、論じ足りなかった点も補足しながら、その要点を五つの点に絞って整理しておきたい。

まず第一に、一般にいわれている「IT 革命」を理解する上で、「情報」をどう捉えるかが大きなポイントになるということである。図1の「データ・情報・知識と知恵の関係図」に示されたように、日常的には明確に区別されていないデータ・情報・知識と知恵との違いを明確に区別して考えることが「IT 革命」を、そして現代社会を、さらには近代社会を捉えるうえで必要不可欠になるということである。データ・情報・知識と知恵の間のこの区別を基礎にして考えるとき、通常いわれるところの「IT 革命」は「他人の知恵」である「知識」の「情報化」に等しく、データ・情報・知識と知恵との根源的な循環（解釈学的循環）を基礎としたものではなく、データ・情報・知識の間だけの知識や情報の循環であり、確かに「操作可能性」（制御の可能性）は高まるかもしれないが、本質的には「惑わし」としての「バーチャル」性が高まり、さまざまな事象にリアリティを感じられない根本原因ともなるということである。

第二に、知識や情報の循環がデータ・情報・知識の間だけの循環に留まり、知恵との間の根源的な循環（解釈学的循環）にまで進まない最大の原因は、近代科学における存在するもの（自然や歴史、社会）に対する「方法の優位」であり、「立て組」により支配された近代技術の本性のもつ究極の危険性である。そして、近代科学の「方法の優位」や近代技術の「立て組」の支配の根本原因は、人間がすべての存在のスプエクトゥム（基体的主体）となり、世界が像となったことにある。このような存在と真理に関する近代特有の捉え方の結果として、図2の第④、第②象限に示されるように、物事が主観と客観の対立図式のなかでしか考

えられないようになり、第①、第③象限（の破線）に示されるような思想と言葉と行為が一致する「真実」（存在の真理）の考え方・領域が失われてしまったのである²³⁾。

第三に、近代社会は多くの成果をもたらしてきたが、それは本質的に、図3に示されるように、どこまで行っても近代人が捉えることのできた世界のなかでのプラス（便利さ）でしかなかったということである。つまり、近代人は表象として取りあげた世界のなかでマイナス（不便さ）を回避し、プラス（便利さ）を選択してきたが、表象されない世界における「見えない影」を、つまり「便利さの裏にある不利益」や「不便さ（自己抑制）に伴う真実や健康」を知る（見る）ことがなかった、というより知る（見る）ことができなかったのである。それは、上で述べた「真実」（存在の真理）の考え方・領域が失われてしまったことの結果である。

第四に、このような視点から考えるとき、近代の歴史は結果として「真実」や「現実」から遠ざかる歴史であったということが出来る。その意味において、近代史は「リアルからバーチャルへ」で表現することができる。そして、実は同じく「リアルからバーチャルへ」で表現されるIT（革命）とはこのような近代と本質的に同じ線上にあり、むしろその極限にあるものであるということが出来る。したがって、IT革命は「リアルからバーチャルへ」ではなく「バーチャルからリアルへ」でなくてはならない。事実、ITのもつ「バーチャル」性が「惑わし」ではなく、正しく「力」として実現されるためには、「リアルなもの」の根源からの正確な把握と、「バーチャル」なものを「リアルなもの」（存在するもの）へしっかりと結びつける真摯な努力・工夫が必要不可欠なのである。その意味で、IT革命はこれまでの経済社会の流れの「バーチャルからリアルへの回転」の象徴であるということである。

最後に、第五として、「バーチャルからリアルへの回転」は決して当為（sollen）としてのみ主張されているのではなく、表象された世界内でのみ判断・選択してきた近代人が、表象されていない世界（存在の忘却）を忘却したとき、「存在の忘却」の忘却が起こり、「存在の成存の見護り」へ「転向」という意味において、存在（sein）でもあるという主張なのである。つまり、図3を用いて示せば、ただ表面的にプラス（便利さ）・マイナス（不便さ）の評価軸でのみ判断していても、やがてその裏側の真実は顕在化せざるを得ないのである。しかし、そのとき、それは存在と真理についての捉え方の根本的な転換をも伴うものになる。その意味でも、現在われわれは「リアルなもの」が何であるかを明確にする必要性に迫られていると言える。

以上、われわれが本稿で述べてきたことの要点を五つに整理してきた。この五つの点に、われわれが本稿において主張したかったことはほぼ表現されているように思うが、ここでは一般的な考え方を中心に述べてあるので、その主張に具体性を欠くと誤解されかねないが、

本稿ではそれが主たる目的でないため、最小限の具体例に留めざるを得なかった。しかし、一般的枠組みとしても説明不足や議論の展開が不十分な点も数多く残されていることは十分承知している。また、われわれ自身がまだ十分に気づいていない重要な論点も残されているであろう。それらの点は、具体的な事例のなかでの検討と合わせて、今後の課題としておきたい。

〈注〉

- 1) 本節のパソコンの歴史については、基本的に、西垣通「『思想』としてのパソコン」を参考にした。西垣編著訳（1997）『思想としてのパソコン』3～64ページ所収。
- 2) 現代社会やIT革命ないしデジタル社会と西欧近代文明との関係については、拙稿（2000）を参照。
- 3) 「人間とITのペア」が「社会の最小単位としての個人」を形成するという発想は、柳沢（2001）215ページを参考にした。
- 4) Winograd & Flores（1986）、およびDreyfus（1979）を参照。後者は今ではすでに反AI論に立つ古典である。
- 5) この文脈での「情報」の意味・重要性については、梅棹（1988）と梅棹（1989）を参考にした。
- 6) ITと知識・知恵との関係についての理解は、柳沢（2001）とわれわれの立場はほぼ同じである。この点では、本稿でも多くを参考にした。柳沢（2001）第1章「バラ色の未来を描くIT革命論」と第4章「技術からみたIT革命論の限界」を参照。

しかし、われわれが本稿で行っている、データ・情報・知識と知恵との間の区別、さらにはそれらの間での循環の質の相違についての体系的な議論は、柳沢（2001）にはみられない。

- 7) この点については、拙稿（2000）を参照。
- 8) ハイデッガーの議論は多様な分野・領域に様々な影響を与えているが、それだけに彼の議論については混乱・誤解も多い。なかでも、彼の主張の核心である「存在論的・一存在的」（ontologisch—ontisch）の区別の混同に基づく誤解が少なくない。したがって、本節では、まずハイデッガーの言うところに「素直に」耳を傾けることにしたい。

因みに、「存在論的・一存在的」の区別については、「存在者の存在を主題とする認識態度を、存在論的と呼び、存在者の属性や関係などを主題にする実証的認識態度を存在的と呼ぶ。」Heidegger（1927）45～46ページ（邦訳）、および482ページの訳者の注記を合わせて参照。

- 9) ここでは、ハイデッガーの技術（および、近代技術）の本性の議論の核心をつかむために、Heidegger（1962）における彼の主張の整理を試みた。
- 10) そもそもテクネー（Technik、techne・技術）という言葉そのものが、このことを含んでいるのである。まず、テクネーとは、職人的な働きや腕前に対する名であるだけでなく、高度の芸術や美術に対する名でもある。したがって、テクネーは、「出で—来—たらずこと」、「ポイエシス」に属し、それは「詩作的なもの（Poietisches・詩い出すもの）」である。また、テクネーという言葉は、エピステーメ（episteme）という言葉とともに、最も広義における認識（Erkennen）を指し、「何かに通暁（熟達）していること」を意味する。認識することは「開明すること」であり、「露わに発くこと」である。それゆえ、語源的に見ても、テクネーとは「露わに発くこと」、「出で—来—たらずこと」なのである。Heidegger（1962）28～29ページ（邦訳）参照。
- 11) ハイデッガーは、このことを「統べながら開き出すものからいってより先に在るものは、われわれ人間にとってはより後に初めて顕わに知られてくる。一人間には、始源的に逸早くものが最後にはじめて

自らを示す。」と表現している。この意味において、自然に関する近世物理学は「近代技術」の先駆者ではなく、「近代技術の本性」の先駆者なのである。Heidegger (1962) 41ページ (邦訳) 参照。

- 12) ここでは、近代の学問の本質に現れる近代の本質の議論に焦点を合わせ、Heidegger (1938) におけるハイデッガーの主張の整理を試みた。
- 13) これに関連して言えば、数学的な自然科学は論理的客観的で厳密であるという一般的な見解は、大きな誤解に基づくものである。というのは、数学的な自然科学が論理的客観的で厳密であるというのは、その対象領域 (自然) に対して論理的客観的で厳密な形で結びつきをつけるから、そうせざるをえないようになっているだけのことだからである。そして、この「結びつき」それ自体が、本文で述べているように、近代の本質的現象である近代科学や近代技術の大きな特質をなしているのである。
歴史や社会を扱う人文・社会科学が、今までのように今後もこの「結びつき」の「意味」を問うことなく、自然科学と同じように、自らの考察すべき領域を扱うとき、人文・社会科学 (したがって、社会経済) の混乱は必至である。というのは、個別科学の理論の内部でいかに論理的で厳密な議論がなされようとも、その理論それ自体の基礎をなすメタ理論、さらにはその枠組みを与える哲学的思考の領域での厳密さがなければ、個別科学の理論の意味はほとんどない (歴史や社会それ自体を正しく扱っていることにならない) からである。
要するに、個別科学の理論やモデルの内部でいかに厳密さや論理性、さらには実証性を追求したところで、その理論それ自体と現実との「結びつき」の「在り方」に目が向けられ、真剣に検討されることが伴わなければ、その理論それ自体はほとんど意味がないことになる。Heidegger (1938) 10~13, 77~78 ページ (邦訳)、および Heidegger (1949) 36, 74~76 ページ (邦訳) 参照。また、注23) も参照。
- 14) したがって、ハイデッガーによれば、学問の近代的企業性格の発展によって、学者は影をひそめ、研究という事業に携わっている研究者にとって代わられる。つまり、仕事を促進するのは、学識ではなく研究という企業となる。Heidegger (1938) 21ページ (邦訳) 参照。
- 15) 【省察】におけるデカルト (Descartes, R.) の主張は決して単純な心身二元論ではなく、彼は人間の思惟の確実性と真理性が神の存在 (の認識) に依存することを認めている。しかし、近代社会が「存在の真理」から乖離し (真実を放棄し)、現実と分離していく必然的な傾向をもった源泉は、ここでハイデッガーも主張するように、やはりデカルトにあったと行うことができよう。Descartes (1641) 73~75, 82~84 ページ (邦訳) 参照。
- 16) この点については、Bell (2001) の最終章 (エピローグ) 「神聖さへの回帰」 (The Return of the Sacred) を参照。
- 17) この点に関して、ハイデッガーは全哲学 (あるいは、学問全体) を樹木に喩えて、哲学の樹が形而上学という根をもち、その根が「存在の真理」という土地によって保たれ養われていると主張する。ここに彼の基本的な立場が明確に表われているが、われわれもまた同様な立場に立つ。Heidegger (1949) 5~7 ページ (邦訳) 参照。
- 18) ケオー (Queau, P.) は、Queau (1993) 「ヴァーチャルという思想: 力と惑わし」のなかで、「リアルタイムで対話、探索、視角化が可能なグラフィック・データベース」としての「ヴァーチャル世界」を「新しい表記法 (エクリチュール)」であるとその影響力の大きさを真剣に捉えている。それだけに、「ヴァーチャル」のもつ「力」と「惑わし」についての本格的な検討を行っており、非常に参考になる。ここでは、彼の「ヴァーチャル」のもつ「力」と「惑わし」についての基本的考え方を参考にした。
- 19) ヨーロッパ近代哲学の方向を決めたと言われるデカルトの有名な『方法序説』が「真理」 (真実) を求めるための「方法についての序説」であったこと、さらに、確実な真理を発見するために徹底的な懐疑をもって臨んだ彼でさえ、初めから一切のものを排除 (懐疑) して無から出発したのではなく、自ら4つの道徳規則を定め、それにしがたい考察を進めていたことなどに、われわれはもっと留意すべきであ

ろう。なぜなら、われわれの一般的な理解(誤解)と異なり、デカルトにおいては、「真理」(真実)の概念や自然や歴史への帰属の考え方がしっかりと残っているものであり、その意味ではまだ健全さを保っているからである。Descartes (1637) 5, 14~18ページ(邦訳参照)。

- 20) ガンジーの「真実の実験」の人生については、Gandhi (1927)、Gandhi (1965)、および Gandhi (1999)を参考にした。ガンジーの思想・実践の核心は、「精神が中心である」ということであるが、それは精神世界と物的世界を分ける西欧近代思想的な心身二分論に基づくものではなく、むしろそれを一体と考えるがゆえに精神(自己抑制)が中心となるべきであるという考え方である。すなわち、思考と言語と行為に関する「自己抑制」(ブラーフマチャリア)である「非殺生」(アヒンサ)を堅持することによってのみ、真理(真実)が捉えられるというものである。
- 21) 「便利さの裏に隠されていた不利益」と「不便さの裏側にある大きな利益」の考え方は、石川英輔(2000)を参考にした。
- 22) 「バーチャル」な世界から「リアル」な世界への「回帰」の具体的な姿をイメージするとき、「科学と技術と芸術を総合」して現代社会のなかに新たな人間的環境をつくり出そうとする池邊(1979)は、根源的な視点を提供してくれる。たとえば、「今後のデザインの方向は、新たなものを既成のシステムに対して付加することではなく、人間生活をトータルにとらえて、何らかのシステム変換を発見し、場合によってはそのものをつくらなくともよい方向を考える方向であろう。いうまでもなく、対象は人間だけではなく、自然全体のトータルシステムである。」という主張などは、われわれの立場と極めて近い。池邊(1979) 259ページ参照。
- 23) 「真実」や「真理」の喪失が経済学を初めとした社会科学に与えた影響は大きく、今日の社会理論全般における方法論上・認識論上の根源的混乱の原因となっている。したがって、その混乱を收拾する道は自ずと明らかである。
- ホジソン(Hodgson, G.M.)は、最新書において、現在の社会科学の最大の弱点が理論を形成するためのメタ理論的な枠組みを与える哲学の領域にあること、それにもかかわらず現在哲学ぬきで多くの学生が経済学や社会学を学んでいること、そして社会科学者の哲学的素養が驚くほど低いことが創造的仕事を妨げていることを指摘している。その上で、社会科学の再構築は、哲学や歴史や伝統に基づかなければ不可能であること、この点でドイツ歴史学派の伝統が見直される価値を持つことなどを主張している。ホジソンのこうした主張は、われわれの立場から見ると、極めて当然のことと思われる。Hodgson (2001) pp.354-355参照。

〈参考文献〉

- [1] Bell, D. (2001) *The Future of Technology*, Pelanduk Publications.
- [2] Descartes, R. (1637) *Discours De La Methode* [野田又夫訳『方法序説』(『世界文学大系13 デカルト・パスカル』)所収、筑摩書房、1958年]。
- [3] Descartes, R. (1641) *Meditations de prima philosophia* [梶田啓三郎訳『省察』(『世界文学大系13 デカルト・パスカル』)所収、筑摩書房、1958年]。
- [4] Dreyfus, H.L. (1979) *What Computers Can't Do: The Limits of Artificial Intelligence* (Revised Edition), Harper & Row [黒崎政男・村若修訳『コンピュータには何ができないか：哲学的人工知能批判』産業図書、1992年]。
- [5] Gandhi, M.K. (1927/29) *An Autobiography or The Story of My Experiments with Truth* [蠟山芳郎訳『ガンジー自伝』中公文庫、1983年]。
- [6] Gandhi, M.K. (1965) *The Health Guide* [丸山博監修・岡美美子訳『ガンジーの健康論』編集工房ノア、1982年]。

- [7] Gandhi, M.K. (1999) 『ガンジー自立の思想：自分の手で紡ぐ未来』（田畑健編、片山佳代子訳）、地湧社。
- [8] Heidegger, M. (1927) *Sein und Zeit* [細谷貞夫訳『存在と時間』筑摩書房、1994年]。
- [9] Heidegger, M. (1938) *Die Zeit des Weltbildes* [桑本務訳『世界像の時代』理想社、1962年]。
- [10] Heidegger, M. (1949) *Was ist Metaphysik? (Fünfte durch Einleitung und Nachwort vermehrte Auflage)* [大江精志郎訳『形而上学とは何か』理想社、1961年]。
- [11] Heidegger, M. (1962) *Die Technik und die Kehre* [小島威彦・アルムブルスター共訳『技術論』理想社、1965年]。
- [12] Hodgson, G.M. (2001) *How Economics forgot History*, Routledge.
- [13] 池邊陽 (1979) 『デザインの鍵：人間・建築・方法』丸善株式会社。
- [14] 石川英輔 (2000) 『大江戸えころじー事情』講談社。
- [15] 西垣通編著訳 (1997) 『思想としてのパソコン』NTT 出版。
- [16] Queau, P. (1993) *Le Virtuel: Vertus et Vertige*, Champ Vallon [西垣通監修・嶋崎正樹訳『ヴァーチャルという思想：力と惑わし』NTT 出版、1997年]。
- [17] 梅棹忠夫 (1988) 『情報の文明学』中央公論社。
- [18] 梅棹忠夫 (1989) 『情報論ノート』中央公論社。
- [19] Winograd, T. & F. Flores (1986) *Understanding Computers and Cognition: A New Foundation for Design*, Ablex Corporation [平賀譲訳『コンピュータと認知を理解する：人工知能の限界と新しい設計概念』産業図書、1989年]。
- [20] 柳沢賢一郎 (2001) 『IT 革命根拠なき熱狂』講談社。
- [21] 拙稿 (2000) 「社会科学の転換と近代西欧文明：デジタル社会と現代アジア」『関西大学経済論集』第50巻第3号所収。